

土器出現の年代と古環境

研究史の整理から

Abusolute Dates and Paleo-environment of the Appearance of Pottery :
From a Review of Research History

工藤雄一郎

KUDO Yuichiro

はじめに

- ① ¹⁴C年代測定法開発以前
- ② 夏島貝塚と後氷期適応論
- ③ 新たな時代区分の模索
- ④ 晩氷期との対比
- ⑤ 最終氷期に遡る較正曲線
- ⑥ 大平山元I遺跡の衝撃
- ⑦ 「佐倉宣言」以降の10年

おわりに

【論文要旨】

「縄文時代の始まり」あるいは「最古段階の土器」の研究は1950年代以降、¹⁴C年代測定と古環境研究の進展と常に密接に絡みながら進んできた。そこで本論では、これらが更新世/完新世(洪積世/沖積世)、氷期/後氷期の境界、あるいは晩氷期と、どのように対比されてきたのかに注目して、戦前から現在までの研究の流れを整理した。縄文時代の始まりは沖積世の海進のピーク以後というのが戦前の一般的な地質時代観であったが、それが大きく変わる画期となったのが燃糸土器の発見と夏島貝塚の¹⁴C年代測定であった。9,000年前を遡る土器と後氷期の開始が結び付けられ、考古学界には「後氷期適応論」が普及した。1963・1966年に公表された福井洞窟や上黒岩岩陰の¹⁴C年代は12,000年代まで遡り、氷期/後氷期の境界として認識されていた1万年前を超え、最古の土器を縄文時代から切り離す時代区分が提案されるきっかけとなるとともに、土器の出現と晩氷期との対比も始まった。1990年代になると、グリーンランド氷床コアなどの高精度の古環境研究が公開され、較正曲線IntCal93によって土器の出現が15,000年前まで遡る可能性が示されたが、決定的な画期となったのは1999年に公表された大平山元I遺跡の較正年代であった。土器の出現が16,000年代まで遡るとともに、晩氷期を突き抜けて最終氷期の寒冷な環境下で土器が使用され始めたことが判明し、「土器出現の歴史的意義」と時代区分の画期としての土器の出現についても再検討が行われはじめた。2000年「佐倉宣言」以降は較正年代の理解とその使用が普及し縄文時代の始まりの年代と古環境との詳細な対比が行われるようになり、時代区分の再検討も進みつつある。

【キーワード】 縄文時代の始まり, 土器の出現, ¹⁴C年代測定法, 晩氷期, 古環境, 時代区分